

地域イノベーション教育のための 知識科学アプローチのコンセプトと実践

白肌邦生*・由井蘭隆也*・山浦晴男**・國藤進*

*JAIST 知識科学研究科, **情報工房

連絡先：kunios@jaist.ac.jp 白肌邦生

1. 背景と目的

地域再生や活性化に向けた創造的かつ具体的なアイデアの創出が期待されている。筆者らは知識の共有・活用・創造のための理論や手法について研究してきた蓄積をもとに、地域イノベーション教育プログラムを開発した。プログラムは主に4つの過程で構成され、地域の資源・課題を発見し課題解決のための方策を構想・実践することまでを目的としている。具体的には、(i)KJ法講義の事前受講、(ii)写真KJ法の習得、(iii)課題地域における実地調査、(iv)成果報告会およびアフターディスカッション、である。

2. 取り組み概要

2013年8月に学生、地域住民、行政関係者からなるグループを構成し、4日間の合宿形式のプログラム実践を行った。石川県能美市に存在する町会から4町会を選定し、それぞれの町の課題と有望な資源についてフィールドワークを行った。

3. 取り組み成果と課題

本プログラムの結果、町会の課題および資源を写真とインタビュー成果を交えた地図として作成した。その上で、取り組むべき地域活性化案を参加学生が住民との意見交換を通じながら作成し、実現に向けて説得していった。この成果は特に、能美市大成町では郷土の歴史・建築物などを知るためのカルタ作成および祭りでの実践に結実し、また、能美市寺井町では、住民基点の民家を利用した「まちなか美術館」の開館につながった。いずれも、地方行政に全て頼ることのない、住民の自主的な活動である。これは本プログラムが学生のフィールドワークスキルの向上や創造的アイデア創出の機会を提供しただけでなく、更に地元住民が課題を「自分ごと」として認識し自発的な取り組みを開始した効果があったことを裏付けている。今後の展開は、その意識をさらに拡大させる上で重要であると考えられる。

この一方で、(1)実施に際しての行政との意識刷りあわせ、(2)フィールドワークスキルの底上げ、(3)教員による継続的な地域との関係性構築など、プログラム実践に向けては、教員の綿密な準備が必要であり、この活動の質を高めより多くの住民の関心をひきつけることも課題である。

地域イノベーション教育のための 知識科学アプローチのコンセプトと実践

白肌邦生*・由井蘭隆也*・山浦晴男**・國藤進*
* JAIST, **情報工房

地域再生や活性化に向けた創造的かつ具体的なアイデアの創出が期待されている。筆者らは知識の共有・活用・創造のための理論や手法について研究してきた蓄積をもとに、地域イノベーション教育プログラムを開発した。プログラムは主に4つの過程で構成され、地域の資源・課題を発見し課題解決のための方策を構想・実践することまでを目的としている。2013年8月に学生、地域住民、行政関係者からなるグループを構成し、4日間の合宿形式のプログラム実践を行った。本報告ではプログラムおよびその結果としての地域活性化案を述べ、更に地元住民が課題を「自分ごと」として認識し自発的な取組みを開始した事例を報告する。

大成町



フィールドワーク期間中に地域の祭に参加。郷土の歴史を伝えるカルタを作成し住民と触れ合いながら街の課題・資源をヒアリング。最終成果は住民の活性化意欲を鼓舞し、独自の活動に展開

寺井町



地域内の公民館活動を調査し、学びと文化の街であることを確認。街の良さを利用して住民に文化の街として再考を促す。合宿終了後は住民が起点となり、まちなか美術館が開催された。

知識科学アプローチ

目的

地域の資源・課題を発見し課題解決のための方策を構想・実践する



(i) KJ法講義の事前受講



(ii) 写真KJ法の習得



(iii) 課題地域における
実地調査



(iv) 成果報告会および
フターディスカッション

本アプローチは合宿形式で8月の4日間で実施。学生たちはグループに分かれ、高齢化・過疎化が進む能美市4地区の可能性と問題点は何か?というテーマで取材を開始。

取材の後は、街を歩いて撮った写真と住民への取材内容とを関連付けてポストイットにコメントを記入。1班10枚程度の「問題点」と「可能性」を抽出し、似ている課題や可能性についてメンバー間で共有。

写真分析では、写真を、その街の課題や可能性を表出化したものと捉える。個々人が取った写真は「なぜその写真を撮ったのか」についてメンバーと意見交換しながら、その地区に共通した写真を抽出。この作業を繰り返し、街を端的に表す代表的な写真をメンバー間で選んでいく。

成果は写真と取材を合わせて地図の形式にし、最終日の総合発表でその報告と状況改善のための活性化案を披露し、住民との意見交換を通じて実行計画を立案する。



2012年度
Wang, Yuzi(王宇子), Zhang, Yifan(張逸凡), 山田 彰加, 安達 智也, 阿部 知也, 阿部 翔太郎, 河島 広幸, 木下 誠, 下川 剛生, 鈴木 大輔, 永井 淳之介, 沼野 剛志, 東 文, 深瀬 創, 松尾 亮輔, 山口 崇英, 橋尾 卓也
教員: 國藤進教授, 山浦晴男氏, 由井蘭隆教授, 白肌邦生助教, 石戸康弘氏



2013年度
大成町: 木下浩之, 大澤 毅, 久保 善宣, 滝ヶ浦 正尚, 石子町: 丹羽 悠斗, 遠藤 純平, 長谷部 礼, 西 康太郎, ウランテグ 和成町: 加藤 秀樹, 長谷川 卓馬, 西山 大貴
金剛寺町: HO Quang Bach, 村井 友貴, AHMED Toufiq, 井上 正男, 近藤 喜十郎氏
教員: 國藤進/JAIST名譽教授, 山浦晴男氏, 由井蘭隆也准教授, 白肌邦生准教授

泉台町



フィールドワークを通じて町内会発NPOの先進的取り組みを発見。合宿終了後はNPO活動を支援する取り組みを開始。Hoは公民館を活用したラーニングスペース開発や買い物弱者支援に展開

和気町



地域の特産物であるゆずの魅力を発見。活性化の目玉として案を作成。学生の加藤は、合宿終了後にゆず大学に通い、独自のゆず活用レシピを開発。地元連携とイノベーションを実践。

- (1) 実施に際しての行政との意識刷りあわせ(町内会長との関係性構築)
- (2) 学生のフィールドワークスキルの底上げ(取材能力・気づき能力の向上)
- (3) 教員・行政による継続的な地域との関係性構築(声かけ役の必要性)